広島派遣の報告

▲派遣最終日、けやきプラザにて

令和２年 12 月６日（日）、けやきプラザふれあいホールにて
「平和の集い～我孫子から平和を願う～」を開催しました。
派遣中学生たちは、広島で学んだことや感じたことを、スライドを交えながら報告しました。

【報告概要】

- 派遣に向けて
- 第１日目
- 第２日目
- 第３日目
- 派遣後の活動
- 私たちの平和宣言

我孫子市では

2005年(平成17年)から
「我孫子市平和事業」として
中学校代表生徒が広島・長崎の式典に参列

**2020年（令和2年）9名の
中学生が広島に訪れる**

我孫子中・高瀬由華さん

我孫子市では 2005 年から毎年、各中学校の代表が、市の派遣中学生として、広島や長崎の式典に参列しています。16 回目となる派遣に、私たち９人が広島を訪れ、多くのことを学んできました。

私たちは 8 月に広島に行き、75 年前に起きたことを見、聞き、肌で感じとってきました。今日は、私たちが広島で体験し感じたこと、考えたことをみなさんにお伝えします。

この発表を通して、皆さんやご家族の間、学校で、平和について考え、語り合う機会ができ、そのことが少しでも平和への道につながるものになれば嬉しいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 派遣に向けて ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日にち　令和２年７月 18 日（土）14 時～

場　所　教育委員会４階　大会議室

（１）事前説明会

- 我孫子市平和事業推進市民会議　会長からの挨拶
- 派遣中学生、引率者の自己紹介
- 派遣行程の説明、注意事項、質疑
- 団長・副団長の決定、班分け

（２）事前学習会

- 我孫子市原爆被爆者の会からのお話
  会長　的山ケイ子さん
- 派遣中学生 OB・OG から、後輩の皆さんに伝えたいこと
  松丸　高大さん　（H27 広島派遣・大学１年生）
  高須万悠香さん　（H29 広島派遣・高校２年生）
- 意見交換

（３）市長、教育長との懇談会

- 市長からの挨拶
- 教育長からの挨拶
- 派遣中学生自己紹介、抱負
- 懇談

■事前説明会、事前学習会

我孫子中・高瀬由華さん

私たち派遣中学生は、7 月 18 日、事前説明と市長表敬訪問のために教育委員会に集まりました。

まず、広島派遣の目的と活動内容についての説明を受けました。

湖北中・
染谷美翔さん

自己紹介の後、我孫子市原爆被爆者の会の方から、被爆体験の話を聴きました。お話しいただいた的山さんは、お母さんのお腹の中で被爆しました。的山さんのお母さんは、大変苦労して子育てをされたそうです。

湖北中・染谷美翔さん

的山さんは、「よくここまで生きて来られた」とおっしゃいました。被爆者の方が生きるには、私たちには計り知れないご苦労があっただろうと思いました。

そして、的山さんとともに活動されてきた、被爆者の会の前会長である宮田さんが、昨年、白血病で亡くなったことを知りました。的山さんのお話から、今でも「原爆の影響」で命を奪われることの悔しさや悲しさが伝わってきました。「私の代わりに、宮田さんの遺影を見てきてください」との言葉を重く受け止め、私たちは派遣中学生としての責任をさらに感じました。

続いて、派遣 OB・OG の方から、派遣生としての心がまえや、派遣先での注意事項などを話していただきました。OB・OG のおふたりが感じたことや、今現在もリレー講座などで活躍していることを話していただきました。

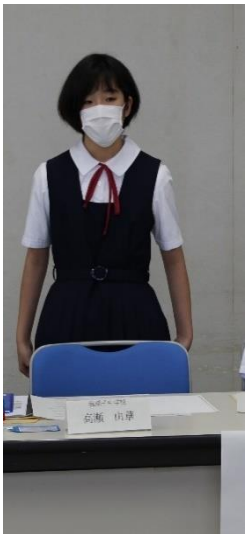
■市長、教育長との懇談会

湖北中・染谷美翔さん

そのあと、星野市長からお話を頂きました。市長から何を見てきてほしい、何を感じてほしいなどのお話ではなく、私達が見て、聞いて、感じたことをもとに、しっかり自分の考えを持ってほしいというお言葉を頂きました。

教育長からは、派遣に対する激励の言葉と私達への期待を込めた言葉をいただきました。

みなさんからお話をうかがうことで、私たち派遣中学生はたくさんの方の思いを背負って広島に行かせていただくのだということを改めて感じました。



次に、市長と教育長に派遣中学生としての抱負を一人ずつ述べました。

湖北台中・中村恭平さん

僕は、「3 日間の広島派遣で学んだこと、感じたことを、家族や学校の仲間など身近な人たちだけでなく、できるだけ多くの人たちに伝えたい。」と話しました。

そして、今年は特別に市長から「やさしい免疫の話」の講義を受けました。

「コロナウイルスを正しく恐れて予防していきましょう、何かあったら遠慮なく言ってください」、という、温かい言葉もいただき、3 日間ご一緒してくださるということにとても安心しました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 第１日目 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

布佐中・藤川幹太さん

８月 10 日　朝７時 20 分、

けやきプラザ前に集合し、出発の会を行いました。

見送りに来てくださった多くの方々に、派遣団としての決意を込めて挨拶し、みんなで思いを一つにして広島に出発しました。

行きの新幹線では、みんな初めてのメンバーで、最初は不安もありましたが、自分から声をかけ合い、すぐに仲良くなることができ、歴史や広島について語り合っていました。

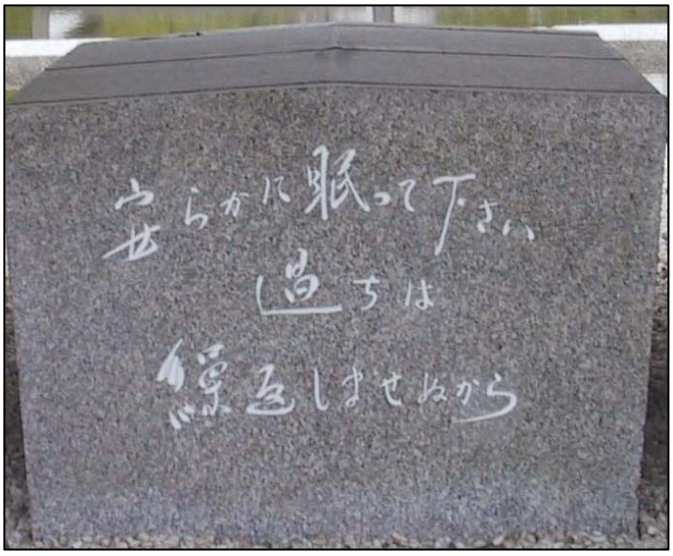
1 日目のはじめに、私たちは平和記念公園に向かいました。

この有名な「原爆ドーム」は、もともと「広島県産業奨励館」という名前で、広島県内の物産の展示・即売や美術展覧会場として使われていました。しかし、爆風の影響により建物が崩壊し、現在のような姿になりました。取り壊しを求める意見もありましたが、戦争の悲惨さを後世に伝え、核兵器廃絶と人類の平和を求めるために現在も「原爆ドーム」と名付けられ残されています。

白山中・信田明音さん

白山中・
信田明音さん

　続いて、原爆死没者慰霊碑を参拝しました。
この原爆慰霊碑は、ここに眠る犠牲者の御霊を雨露から守りたいという気持ちから、埴輪型に設計されたといいます。そして、設計者が原爆ドームを大切にしていたこともあり、資料館とドームの間に作られています。埴輪の中央に石棺があり、その中に原爆犠牲者の名を記入した過去帳が納められています。



この碑文の
「安らかに眠って下さい
過ちは繰返しませぬから」 という言葉については、広島市は碑文の趣旨を正確に伝えるため、説明板を設置しました。その説明板には、「碑文はすべての人びとが原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である。過去の悲しみに耐え憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い。真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻まれている」と記されています。平和記念都市として、この説明板で平和を訴えていることがわかりました。

白山中・寺島一樹さん

その後、ボランティアガイドの方に案内をしていただきながら、広島平和記念公園を見学しました。

貴重なお話を聞き逃さないように、メモをとりながら話を聴きました。お話の中で、「みんな笑いながらピースをして写真を撮って帰っていくけど、ここはそんな場所じゃない。もっと平和について考える場所だ。」との言葉が特に心に残っています。僕はどれほど平和について考えられていたのか、と自分自身を省みるきっかけの言葉になりました。

これは、被爆した墓石です。原爆の爆風で浮き上がり、その間に石片が入ったためか、重い墓石の下に石片が挟まれています。こんなに重い墓石が動かされてしまうと考えると、その爆風がどれほどのものかがわかります。そして、それと同時に、この爆風を人間が受けたらどれくらいの被害が出てしまうのだろうかと考えさせられました。

この「原爆供養塔」には、当時、広島の街で燃やされたたくさんの身元不明の人骨が埋葬されています。

亡くなってから家族の元に帰ることすら叶わなかった人が、今も大勢眠っていると知り、言葉を失いました。

この「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」は、原爆で亡くなった韓国人のために建てられました。原爆は、日本人だけでなく、広島にいた韓国人や中国人、東南アジアの学生、また捕虜として広島にいたアメリカ兵も含め、一瞬にして多くの命を奪いました。元々は、平和記念公園の外にありましたが、人種差別等の問題で平和記念公園内に移転されたそうです。

原爆が落ちたのは広島でも、苦しんだのは日本人だけではないということを改めて感じました。

■被爆体験講話

我孫子中・
山元誠人さん

次に私たちは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館へ向かいました。そこで、被爆者の國分さんの体験講話を聴きました。國分さんは、１６歳で被爆し、９人家族のうち４人を亡くされました。

「８時１５分、ピカッと閃光。爆風にあおられ、飛んできたものに頭を強く打たれました。晴れて明るかった広島は、ほこりやちりなどが舞い夜のように暗くなりました。光がすーっと戻ってきて、周りが見えるようになってきました。辺りを見回すと、そこは地獄と化した広島でした。急いで家に帰り、家族を助けようとしましたが、母と弟は倒れた家具につぶされ、声をかけても反応がありませんでした。仕方なく、助かった家族とともに逃げました。振り返って家の方向を見ると、煙が立っていました。」

と話してくださいました。そして、

「母は生きて焼かれたのではなく、死んでから焼かれたのがせめてもの救い」

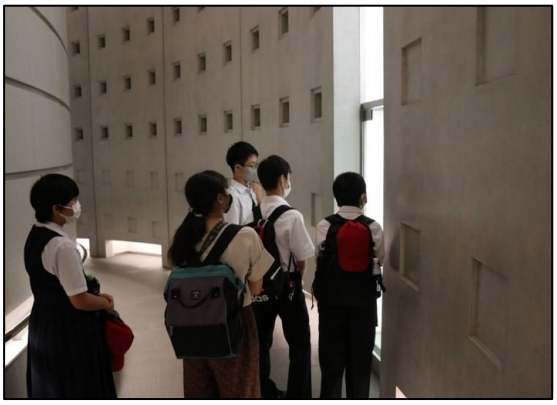
とおっしゃったのです。それを聞き、原爆とはこんなにも人を苦しめるものなのかと、胸を締めつけられる思いがしました。

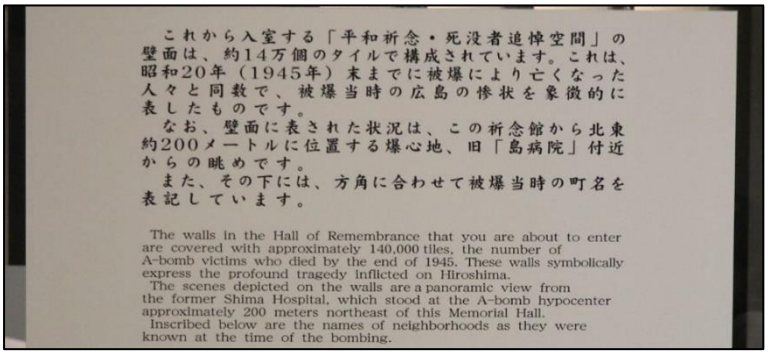
湖北台中・大津佳奈さん

言葉少なげにお話をされる國分さんの姿はとても印象に残りました。本当は思い出したくないのに、今私たちのような若者に伝えなければ、これからの世代に届かないという使命感で語ってくださっているのだと強く感じました。

そして、この記憶は絶対に伝えていかなければならないと感じました。

当時の広島には、國分さんのようなとてもつらい経験をされた方が、たくさんいらっしゃったのです。普段、当たり前のように聞いていた「戦争を繰り返さない」という言葉、この言葉にはどれだけ多くの人々の願いが込められていたのかに気付かされました。





これから入室する「平和祈念・死没者追悼空間」の壁面は、約14万個のタイルで構成されています。これは、昭和20年（1945年）末までに被爆により亡くなった人々と同数で、被爆当時の広島の惨状を象徴的に表したものです。

なお、壁面に表された状況は、この祈念館から北東約200メートルに位置する爆心地、旧「島病院」付近からの眺めです。

また、その下には、方角に合わせて被爆当時の町名を表記しています。

The walls in the Hall of Remembrance that you are about to enter are covered with approximately 140,000 tiles, the number of A-bomb victims who died by the end of 1945. These walls symbolically express the profound tragedy inflicted on Hiroshima.

The scenes depicted on the walls are a panoramic view from the former Shima Hospital, which stood at the A-bomb hypocenter approximately 200 meters northeast of this Memorial Hall.

Inscribed below are the names of neighborhoods as they were known at the time of the bombing.

その後、追悼空間スロープを下り、平和祈念・死没者追悼空間へと進みました。ここは平和について考える場所です。

最後に、遺影コーナーで我孫子市にお住まいであった被爆者の宮田さんの遺影を拝見しました。事前説明会でお話をしてくださった的山さんとの約束を果たすことができました。私たちの身近に、原爆で亡くなる方が今でもいらっしゃるという事実を身をもって知ることになりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 第２日目 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

我孫子市平和記念事業
広島でのスケジュール

＜8月１１日（火）第２日目＞

３　原爆の子の像参拝と千羽鶴奉納
４　平和記念資料館の見学
５　本川小学校平和資料館見学
６　世界遺産宮島・厳島神社の見学

我孫子中・高瀬由華さん

２日目、私たちは折り鶴を奉納するために、「原爆の子の像」を訪れました。

三脚のドーム型の台座の頂上に金色の折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像が立ち、左右には明るい未来と希望を象徴する少年少女の像があります。像の下におかれた石碑には、

「これはぼくらの叫びです　これは私たちの祈りです　世界に平和をきずくための」

という碑文が刻まれています。

私たちが奉納した折鶴は、我孫子市民の皆さんが心を込めて折り、集まった折り鶴です。また、市内の小中学校で作られた千羽鶴も奉納しました。

ここには、日本だけでなく、世界中から贈られたたくさんの鶴が奉納されています。

湖北中・染谷美翔さん

次に、広島平和記念資料館を見学しました。新型コロナウイルスの影響で入場制限がありましたが、それでもたくさんの人が訪れていました。日本人だけでなく、海外からいらっしゃった方も多く、原爆について知り、平和について考えようとする人がたくさんいることが心強く思えました。そして、このような中でも派遣していただけたのだから、ここでたくさんのことを学んで帰ろうと思いました。

これは資料館入り口にある、「地球平和監視時計」です。

時計の下には、2 つの日数カウンターがあり、1 段目は、広島に原爆が投下されてからの日数。2 段目は、最後の核実験からの日数が表示されていて、「原爆が投下された日のことを忘れてはいけない」という思いと、核兵器廃絶へ願いが込められています。

私たちが訪れたこの日は、最後の核実験の日からわずか 545 日目であることがわかります。今もなお、世界に核兵器が存在し、実験が行われているのです。

「これを、どう受け止めるか。」

この時計が問いかけます。

この展示は、原爆が投下された瞬間を再現しています。

緑豊かな町が原爆の投下後、一瞬で廃墟となります。原爆が与えた被害の大きさを、これでもかと訴えてきます。

白山中・信田明音さん

この資料館を見学しているとき、思わず目をそむけたくなることもありました。それでも私たちは、まずは、原爆の恐ろしさや残酷さをしっかりと見なければならない、知らなければいけないと思いました。見たくないものから逃げずに知ることの大切さを改めて感じました。

資料館には、原爆が投下された瞬間の悲惨さと恐ろしさを感じさせる被爆者の遺品も数多く展示されています。このように見ることができているのは、家族を失った悲しみを多くの人に伝えたいという遺族の人の思いがあったからです。

これは、私たちと同じ年齢で亡くなられた中学生の遺品です。

これは3歳の銕谷伸一（てつたにしんいち）ちゃんの三輪車です。自宅前で、この三輪車で遊んでいるときに被爆し、その日の夜に亡くなりました。父親は、伸一ちゃんをひとりで墓に入れるのはかわいそうだと、亡骸を三輪車とともに自宅の裏庭に埋葬しました。

そして40年後、父親は墓地に移すことを決心し、この三輪車を資料館に寄贈しました。

これらを間近で見て、家族を大切にする気持ちはいつの時代でも変わらないのだと感じました。

これは黒く焼け焦げたごはんが入っている弁当箱と水筒です。当たり前の日常があったことがわかります。そんな当たり前の生活を奪ってしまう戦争の悲惨さをあらためて感じました。

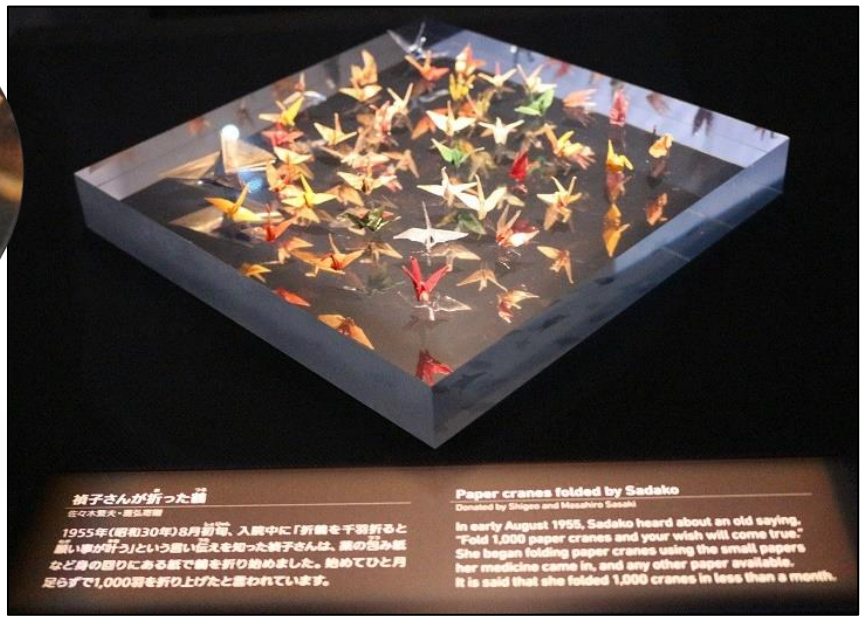
布佐中・寳春香さん

資料館には、折り鶴が展示してありました。資料館に来る前に訪れた、「原爆の子の像」のモデルとなった、佐々木禎子さんが折った鶴です。

禎子さんは、2 歳の時に被爆しましたが、その時は無傷でした。ところが、被爆から 9 年後、12 歳の時に、原爆による放射線の影響で白血病を発症しました。入院中には、千羽の鶴を折ることで病気が治ると信じていたため、禎子さんは、千羽以上の鶴を折り続けました。

しかし、その願いも届かず、8 か月間の闘病生活の後、12 歳の短い生涯を終えました。

当時、折り紙は高価で、薬やお菓子の包み紙で折られています。ちなみに、禎子さんの折った貴重な折り鶴が、我孫子市内のアビスタ 1 階に飾られています。



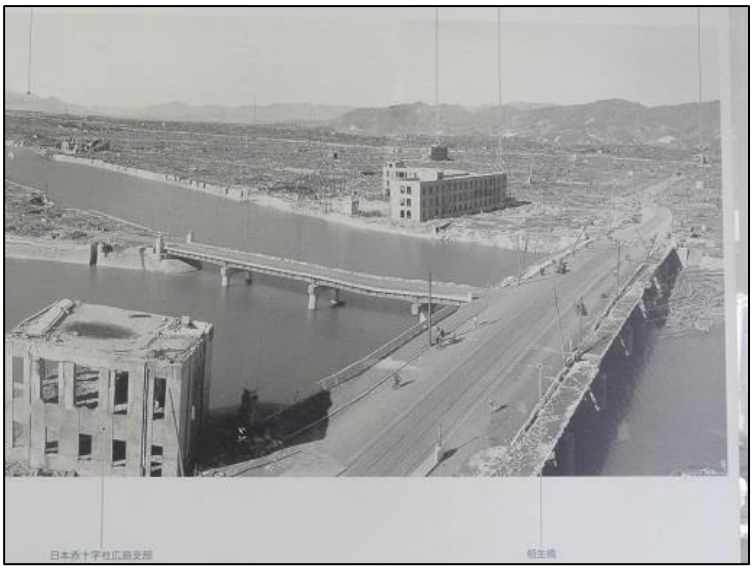
次に、本川小学校平和資料館を訪れ、見学しました。本川小学校は爆心地の最も近くで被爆した小学校です。当時としては近代的な鉄筋コンクリートの造りだったため、全壊を逃れることができました。ですが、実際に見ると予想以上に損傷が激しく、当時の様子を物語っていました。

布佐中・
寳春香さん

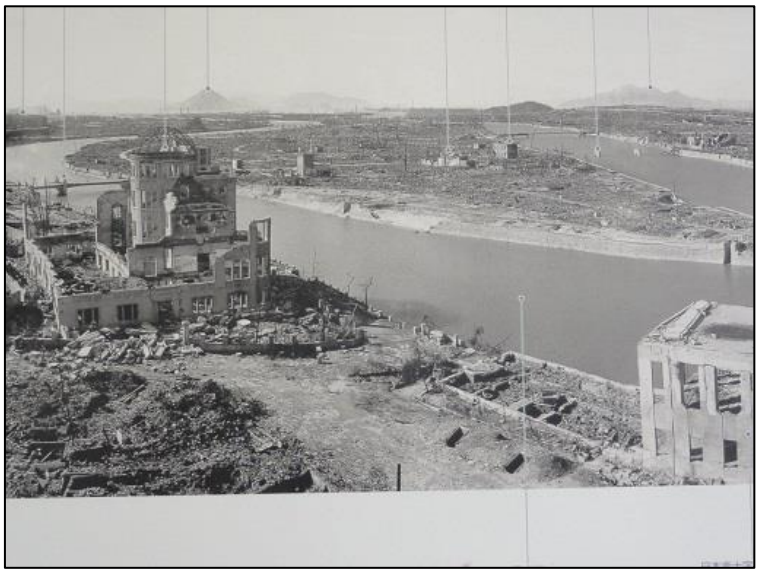
本川小学校平和記念資料館には、写真パネル 30 点、被爆資料 30 点が展示されています。

たくさんの展示がありましたが、一つ一つから原爆の恐ろしさが伝わってきました。

地下室には、被爆する前の広島のジオラマが展示されていました。

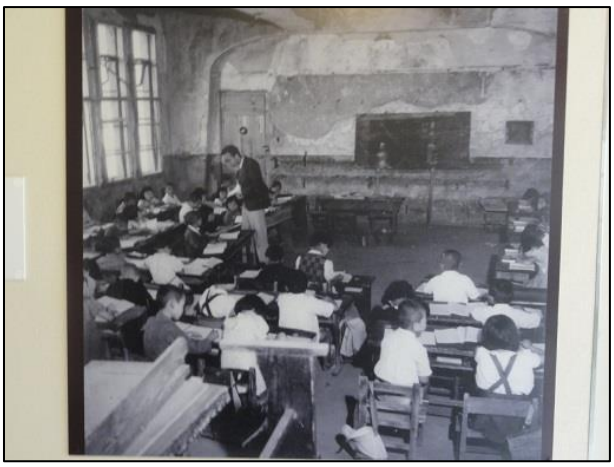


これは、被爆直後の広島の風景です。形が残っている建物はこの写真の中に２つほどしかありません。T 字型の橋が相生橋で、その奥に見えるのが、私たちが見学した本川小学校です。



これは、被爆直後の原爆ドーム周辺です。先ほどの写真と同様、ほとんど何もない、瓦礫しかない状態です。

当時、３年生以上は学童疎開をしており、学校には 1、2 年生の児童約 400 人がいましたが、命が助かったのは一人だけでした。



被爆から約６か月後、学校が再開しました。これは、被爆後の授業の様子です。
机、いす、黒板以外には何もなく、窓ガラスも壊れていることが分かります。

これは、外から見た校舎です。子どもたちは、こんな建物の中で授業を受けていたのです。

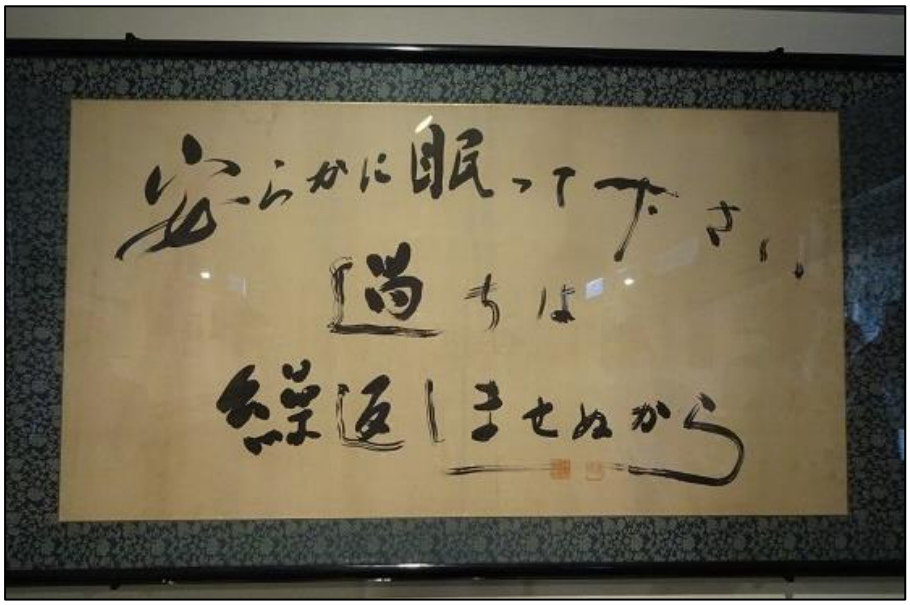
これは、運動会の様子です。窓ガラスも吹き飛んだ外郭だけの校舎の前で活動しています。

大好きな街、大好きな人を奪われた中でも、子供たちは一生懸命生活していました。

左のガラスは、高熱によって変形し、口を閉じられていて、中には 75 年前の液体がそのまま封じ込めれています。真ん中は、溶けたガラスのかたまりです。被爆した時に溶けたガラスのかたまりはいくつも展示されています。これだけの高熱で、たくさんのものが原爆によって、壊されたということです。

これは、熱線で溶けた鉄かぶとです。鉄でできたものが変形してしまうほど、高い温度だったことがわかります。

白山中・寺島一樹さん



これは、平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑に刻まれている碑文の原文です。
「戦争をしてしまった」という過ちを再び繰り返してはいけないという思いが伝わってきました。

これは市内の小学生が平和への祈りを込めて作ったとうろうです。今年は中止となってしまいましたが，例年は８月６日に原爆ドームのそばの元安川で、とうろう流しが行われます。

また、ここにも全国から贈られた千羽鶴が奉納されていました。中には、メッセージがついたものもあり、たくさんの人の平和への思いを感じることができました。

その後、フェリーに乗って世界遺産・厳島神社を訪れました。宮島の自然や人のあたたかさに触れ、今が平和であることを改めて実感するひとときになりました。

建物や文化財を見ると、原爆の被害から町や文化を復興させてきた人の命と生きる力を感じます。だからこそ、ここでも、何もかもを一瞬で失わせる原爆というもののむごさや恐ろしさを思わずにはいられませんでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 第３日目 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最終日、前日夜の反省会での話し合いをもとに、もう一度平和記念資料館を見学しました。前日見きれなかったもの、もう一度心に留めておきたいものを、よりじっくりと見ることができました。

我孫子中・山元誠人さん

左下の写真は、1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、広島に投下された原子爆弾の模型です。「リトルボーイ」と呼ばれるこの爆弾は、日本語では「少年」といいます。

広島に原爆が落とされて 3 日後の 8 月 9 日 11 時 2 分、2 発目の原爆が長崎に落とされました。広島に落とされた原爆「リトルボーイ」よりも太って見えたことから、「ファットマン」と呼ばれています。大きかった分、その威力も 1.5 倍であったといわれています。しかし、長崎は周りを山に囲まれている地形であったため、広島よりも被害が小さかったそうです。

世界には、まだ原子爆弾が約 13,400 発残されていると言われます。こんなにもたくさんある原子爆弾を一つでも減らすことができなければ、平和になったとは言えないと思っています。

布佐中・藤川幹太さん

その後、平和記念公園の周りを歩きながら、多くの慰霊碑を見ました。どれだけたくさんの方々の命が失われたかを改めて実感しました。

そして、もう一度、原爆死没者慰霊碑を参拝しました。

「安らかに眠ってください　過ちは繰り返しませぬから」という文字を見つめ、原爆で命を落とされた方に向かい、心の中で声をかけました。

湖北台中・中村恭平さん

最後に、平和記念公園レストハウスに行き、見学しました。
左上の写真は、被爆前の旧中島地区の街並みを再現したパノラマ模型です。多くの家が建ち並び、草木が生えています。
３階にある展示室では、被爆前の中島地区の賑わい、中島地区の移り変わりやレストハウスの歴史を振り返る写真等が展示されていました。

地下１階では、建物内で唯一の生存者の手記や、被爆当時の様子を描いた絵、被爆直後の燃料会館の写真などが展示してありました。

我孫子中・高瀬由華さん

１日の終わりは、団長を中心にして、毎日、反省会を行いました。

皆、言葉は違っても、話し合いの先には、全員が戦争から起きた悲しみを強く感じ、未来は必ず平和にするという願いがありました。戦争から目を背けてはいけない。見て聞いて知ることから、平和を考えていかなければならないと考えていました。

そして、感想や反省だけでなく１日１日の貴重な経験から感じたことを、どうしたら、次の日の活動に生かし、より良いものになるかも考えました。